

解説 ● 柴田 克彦 (音楽ライター)

今回は、“炎のマエストロ”コバケンがおくるチャイコフスキー特集。マエストロは、コンサートで再三再四取り上げ、CDでもロンドン・フィルを指揮した3度目の交響曲全集の録音を昨年完結させるなど、このロシアを代表する巨匠の作品の演奏に、並々なぬ力を注いできました。中でも三大交響曲は十八番中の十八番。第4番と第6番を各4回、第5番をなんと8回(!)録音していますから、もはや彼のシンボルと言っても過言ではありません。

プログラムは、チャイコフスキーの看板ジャンルである、交響曲、管弦楽曲、オペラの有名な楽曲で構成された魅惑のハイライト。全4楽章の曲から各楽章を1つずつ選ぶといった配慮もなされていますし、お話をまじえながら魅力のエッセンスが紹介されますから、この作曲家への理解が一挙に深まります。

コバケンが聴かせるチャイコフスキーの音楽は、熱気にあふれた雄弁なドラマ。70歳を超えた近年は円熟味がいっそう加わり、スケールの大きさとこまやかな味わいを増しています。華麗なサウンドとリズム、美しい旋律を、極め付けのタクトで味わえば、“思わず拍手がしたくなる”こと間違いなしです。

大作曲家チャイコフスキーの生い立ち

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840-1893)は、製鉄所の所長だった父の赴任先、ウラル地方のヴォトキンスクに生まれました。母の父はフランス人。つまり彼は、1/4フランス人の血が入ったクォーターです。ちなみにポーランド出身のショパンもフランス人とのハーフでしたから、こうした血筋は西欧で支持される源になったかもしれません。幼少から音楽に熱意を示した彼ですが、父の意志を汲んでペテルブルクの法律学校で学び、卒業後は法務省に勤務しました。しかし音楽への情熱さめやらず、官吏を辞めて、後にペテルブルク音楽院となる音楽学校に入学。その第1回卒業生となり、当初はモスクワ音楽院の教師を務めながら作曲を続けました。



チャイコフスキー
(1840-1893)

卒業翌年の1866年、早くも交響曲第1番を完成。1875年にはピアノ協奏曲第1番、1876年にはバレエ『白鳥の湖』を作曲します。1877年、教え子のミリューコヴァと電撃結婚したものの、神経を病んで入水自殺を図り、すぐに別居。しかし同年から鉄道王の未亡人メック夫人より多額の年金を受けて作曲に専念することになり、2人は手紙だけの奇妙な関係を15年間続けました。ただこの激動期の1878年に、交響曲第4番、ヴァイオリン協奏曲、歌劇『エフゲニー・オネーギン』を相次いで完成しています。

その後しばらくは、西欧やウクライナの妹の家などで多くの時間を過ごし、『弦楽セレナーデ』などを発表しました。1885年45歳にして初めて自宅をもち、1888年以降は、交響曲第5番、バレエ『眠りの森の美女』『くるみ割り人形』などの名作を完成。指揮活動でも成功を収めました。ところが交響曲第6番『悲愴』初演の9日後に急死。一応コレラとされていますが、死因は謎に包まれています。ときにその死は53歳時。有名な白髭の写真の印象とは違って、意外に若かったといえるでしょう。

チャイコフスキーは「西欧派」と呼ばれ、西欧的な手法とロシア的な語法を融合させた普遍的な作風で、グローバルな評価を獲得しました。有名作曲家の中では、短調作品とオーケストラ音楽の比率が高いのも特徴的。その華麗なオーケストレーションは比類がなく、甘美な旋律、情熱的なロマンティズムと相まって、多くの作品が定番レパートリーとなっています。

Program Notes

【第1部】 豊かな響きと名旋律にあふれたオペラ、弦楽、バレエの看板曲

幕開けは、歌劇『エフゲニー・オネーギン』より“ポロネーズ”。チャイコフスキーは、日本で抱くイメージ以上にオペラに力を注ぎました。本作は、その10にのぼる作品の中で、『スペードの女王』と並ぶ代表作。交響曲第4番と同じ1878年に完成され、翌年初演されました。内容は、貴族のオネーギンとやがて公爵の妻になるタチヤーナの実りなき恋物語。“ポロネーズ”は、第3幕初めの社交場における舞踊音楽です。ポロネーズ自体は、ポーランドのゆったりとした民族舞曲。ここではそのリズムを用いて、貴族の世界にふさわしい華やかな音楽が繰り広げられます。

次いで弦楽合奏の分厚い響きを。この形態の代表的名作『弦楽セレナーデ』より第1楽章です。セレナーデは本来「夜の音楽」ですが、本作はモーツァルトの『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』の流れを汲む自由な組曲。「モーツァルトへの愛情による内面的な衝動」(手紙より)によって、1880年に短期間で作曲され、翌年初演されました。

第1楽章「ソナティナ形式の小品」は、ソナティナ=小さなソナタの題名通り、展開部のない簡潔な楽章です。アンダンテ・ノン・トロppoの荘重な序奏(以前CMで頻りに流れていました)から、アレグロ・モデラートの主部に入り、流麗な第1主題と軽やかな第2主題を軸に進行。最後に序奏が再現されます。

今度はバレエ音楽『くるみ割り人形』からの4曲が続きます。本作は、『白鳥の湖』『眠りの森の美女』に続く三大バレエの第3弾。晩年の1892年、ペテルブルクのマリンスキー劇場の依頼で作曲され、同年12月に初演された、円熟の手による傑作です。物語は「少女クララがクリスマス・イヴにもらったくるみ割り人形が、夢の中で王子に変身。ねずみとの戦いで王子を救ったクララはお菓子の国に招待され、様々な踊りの歓迎を受ける」といった楽しいファンタジー。クリスマス・シーズンの定番演目にもなっています。



くるみ割り人形

“行進曲”は、子供たちがクリスマス・ツリーを前に踊る、軽快で歯切れ良いナンバー。以下3曲は、お菓子の国の祝宴の舞踊音楽です。“トレパーク”は、ロシアの農民の踊り=トレパークの形をとるエネルギッシュな音楽。“葦笛の踊り”は、アーモンドのお菓子の精の踊り。3本のフルートの動きが際立つ爽やかな1曲です。“花のワルツ”は、金平糖の精の侍女たち(演出によっても変わります)が踊る、本作の看板曲。序奏から、美しいハーブ・ソロを経て、夢幻的なワルツが展開されます。

【第2部】 時代を超える屈指の人気作「三大交響曲」の名楽章

後半は、同ジャンル史上屈指の人気を誇る「三大交響曲」のハイライト。最初は、生涯最後の作品、交響曲第6番『悲愴』より第3楽章です。チャイコフスキーは、「作曲しながら幾度となく泣いた」などの言葉を手紙で述べつつ、1893年8月末に本作を完成。10月28日に自身の指揮で初演しましたが、11月6日に世を去りました。そしてこうした経緯と、通常は快速調で華やかな第4楽章がアダージョ・ラメントーソ(緩やかに、悲しく)で書かれた異例の構成が相まって、「死を予感した音楽」、引いては「死因は自殺」との説が唱えられるようになりました。現在は当初言われたコレラ説が主流ながらも、真相は謎のままです。

確かに「悲愴」感が支配した作品ですが、第3楽章：アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェは、全曲中唯一の明るく華やかな音楽。南イタリアの民俗舞曲タランテラのリズムによるスケルツォと行進曲が合体した、ユニークな構成がなされています。細かな動きに始まり、ダイナミックな行進曲となって高揚を続け、激烈に終結しますから、まるで通常の交響曲のフィナーレのよう。とはいえ、この音楽を“悪魔的”と捉えたり、奥底に悲愴感を察知する見方もなくはありません。

おつぎは、**交響曲第5番より第2楽章**です。第5番は、1888年、国外滞在が多かったチャイコフスキーが、好環境のフロロフスコエ村に居を構えたのを機に作曲。同年初演されました。当初ロシアの批評家からは評価されなかったものの、翌年ハンブルクの公演で大成功を収め、西欧を中心に人気を獲得しました。本作は、チャイコフスキーが述べた言葉から、「運命」がテーマだと解釈するのが一般的。「運命主題」と呼ばれる第1楽章冒頭の旋律が、各楽章のどこかに必ず登場します。

第2楽章：アンダンテ・カンタービレ、コン・アルクーナ・リチェンツァ（コン以下は「多少の自由さをもつ」の意味）は、甘美で陶酔的な緩徐楽章。ホルンのソロで出される美しい主題を中心に進み、クラリネットのソロに始まるやや速めの中間部が挟まれます。夢や憧れを感じさせる音楽ですが、陶酔の頂点を「運命主題」が激しくさえぎるのが印象的です。

最後は、**交響曲第4番より第4楽章**。第4番は、第5番の10年前に書かれた、三大交響曲の中では早い時期の作品です。メック夫人からの年金が開始された1877年春頃に作曲を始め、結婚破綻による神経衰弱を回復すべく西欧で保養した際の1878年1月、イタリアで完成。同年初演されました。本作も手紙などから「“運命との闘いと勝利”を描いた」とみられており、第1楽章冒頭の旋律＝これまた「運命主題」が、全曲の核となります。

第4楽章：アレグロ・コン・フォーコは、迫力満点のフィナーレ。冒頭の爆発的な第1主題、ロシア民謡「野に立つ樺の木」に基づく第2主題、活発な第3主題が交互に登場しながら進みます。終盤で活気をさえぎるファンファーレ風の動きが「運命主題」。その後圧倒的な興奮が戻って終結します。チャイコフスキーが手紙で「民衆の祭りの日。こんなに素朴な幸福がある。まだ生きていけるのだ」と述べた音楽で、コンサートは華々しく幕を閉じます。



チャイコフスキー最晩年の肖像画

チャイコフスキーが評価した作曲家たち

弦楽セレナーデの経緯からもわかるように、チャイコフスキーはモーツァルトを敬愛していました。それは、『モーツァルティアーナ』と題した編曲作品や、歌劇『フィガロの結婚』のロシア語翻訳（今でも使われているとか）にも表れています。では、他の作曲家をどう見ていたのでしょうか？

彼は一時期、「ロシア報知」という新聞で音楽評論を執筆しており、その紙面などで述べた作曲家の寸評が、ある伝記にまとめられています。それを見ると、評価が高いのは、シューベルト、メンデルスゾーン、シューマンやバレエ作曲家ドリーブ。ロシア勢の中では、後輩のリムスキー＝コルサコフを「祖国のもっとも美しい誉れとなるだろう」と唯一絶賛し、先見の明を示してもいます。また賛否相半ばするのが、バッハ、ハイドン、ベートーヴェン、ワーグナー、完全に否定しているのが、リスト、ブラームスなど。これらは、彼の作風と立場を鑑みればわかるような気がなくもありません。ただ全否定したブラームスとは、後に会うて食事するなど親交をもっているのが面白いところです。

ちなみに、彼は新聞で自作の上演まで批評するはめに……。結局評論家生活は長続きしなかったようです。

COLUMN



リムスキー＝コルサコフ
(1844-1908)

しばた・かつひこ（音楽ライター）／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。コンサートのプログラム、宣伝媒体、CD、雑誌等の原稿執筆およびプログラム等の編集業務のほか、「ラ・フォル・ジュルネ」での講演や一般の講座も行うなど、クラシック音楽を中心に幅広く活動中。